

行為者はなぜ観察者の対応バイアスを過大視するのか

— もう一つの説明可能性 — ^{1) 2) 3)}

工 藤 恵理子

〔キーワード〕 対応バイアス, 対応バイアスの過大視, 属性推論

行為者による観察者の判断の推測についての研究の増加

対人場面における対人認知に関する研究は、専ら観察者が行為者を判断するという枠組みで行われてきたが、近年、行為者の視点から、行為者自身が観察者にどのように見られるかを推測する研究が増えてきている。これらの多くは、これまでの対人認知研究の延長線上にあるのではなく、むしろ自己（評価）研究の延長にあり、人々の自己評価の1つとして、他者から見られる自分の推測を扱っている。もちろん、これまでも反映的自己評価に関する研究は存在していたが（eg., Shrauger & Schoenmen, 1979; Kenny & Depaulo, 1993）、それらの研究においては、反映的自己評価が正確であるのか（実際の他者評価と一致するのか）ということに焦点が当てられ、どのようなプロセスによってなされるのかという点については、焦点が当てられてこなかった。

近年増加している行為者による観察者の推測に関する研究は、自分に対する評価に限定されず、より広い意味での相互作用場面における相手の認知に関する推測のプロセスに焦点を当てている。例えば、Gilovich, Savitsky, & Medvec(1998)は、行為者に自分の内的状態について観察者がどう評定するかについて推測させる実験をさまざまな形で行い、自分の内的状態のメタ認知においては、係留と調整のヒューリスティックが働き、自分の内的状態を手がかりに最初の判断を行い、他者は内的状態を直接知り得ないので、その分の調整を行うが、それが不十分であるために、現実には他者が認知するよりも、自分の内的

状態が他者にそのままの形で認知されると推測されるとしている。

彼らの実験では 実験参加者たちは、順番に質問のカードを引き、それに口頭で回答した。カードには質問だけでなく、真実を述べるか嘘をつくかの指示が書かれていた。残りの実験参加者は、そのときに回答者が嘘をついているかどうかを見抜くよう教示された。また、実験参加者は自分が嘘を言った場合は、その嘘が何%の観察者によって見抜かれるかを推測した。回答者の推測は、実際の観察者による嘘を見抜く程度を大きく上回っており、実験参加者は自分の嘘が見破られると過度に予測していた。つまり、嘘をついた場合、実験参加者は実際よりも「嘘(をついていること)」が露わになっていると予測していたのである(図1)。この

傾向は、見えないはずの自分の内面が観察者に見えてしまうと錯覚していることであるとされ、「透明性の錯覚 (illusion of transparency)」と呼ばれている。

彼らの別な実験では、実験参加者は、

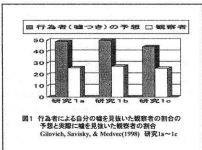


図1 行為者による自分の嘘を見抜いた観察者の割合の予想と実際に嘘を見抜いた観察者の割合
Gilovich, Savitsky, & Medvec(1998) 研究1a~1c

外見は同一の5つの飲み物のうち、1つだけまずい味の飲み物がまぜられている飲み物のセットを順に飲み、どれがまずい飲み物なのか観察者に見抜かれなように振る舞った。一方、観察者は実験参加者が5つの飲み物を飲んでいる所のビデオを見て、何番目の飲み物がまずい味なのかを当てようとした。観察者は10人配置されたが、どれがまずい飲み物が当てられた観察者の人数の平均は3.56人でありチャンスレベルと異ならなかったが、飲み物を飲んだ実験参加者による、まずい飲み物を当てる観察者の人数の予測は平均で4.91人であり、実際の観察者による推測の正解率よりもかなり高かった ($t(14) = 3.36, p < .005$)。

ここでも、飲み物を飲む役の実験参加者は自分の内的状態（まずいと感じていること）が外から観察可能であると過剰に予測し、透明性の錯覚が生じていたことが示された。

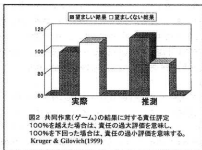
他にも“スポットライト効果”と名付けられた現象がある。これは、現実よりも自分が他者の注目を浴びていると推測する傾向のことである。この実験では、実験参加者は歌手のバリー・マニロウの顔写真を大きく胸にプリントしたTシャツを着て教室に入らされた。そして、未知の他の実験参加者と相互作用をした後、自分のTシャツにプリントされた写真の人物が誰であったか覚えている実験参加者の割合を尋ねられた。Tシャツを着せられていた実験参加者の推測は、実際にTシャツの顔写真が誰か覚えていた人の割合を平均で23%も上回り、自分の様子（この場合は来ているTシャツ）が他者に注目されていると過大に評定していたことが示された（Gilovich, Medvec, and Savitsky, 2000）。

また、授かり効果（endowment effect）も、この対人関係におけるメタ認知の歪みで説明することができるとされている（VanBoven, Dunning, and Loewenstein, 2000）。授かり効果とは、いったん自分が所有した物品を手放す際に、人は入手した金額よりも高い金額をつける傾向があり、単に所有してただけで、その物品の価値を高く評価するようになる傾向のことである。この傾向を言い換えると、売り手と買い手は互いの認知の推測において、認知の類似性を過大視してしまっているとみることができる。つまり、売り手は、自分が感じているその物品に対する価値が、他者（買い手）にも共有されていると誤って推測してしまうのである。さらに興味深いことに、買い手は、売り手が自分の予測よりも高い価値をつけることを、いわゆる授かり効果ではなく、売り手自身の属性（ケチ、お金が必要）で説明しようとする傾向が見られている。

他には、自分の失敗は他者から過度に厳しく評価されると推測する傾向の存在も指摘されている。Savitsky, Epley, and Gilovich (2001) は、人は自分が失敗してしまったときの状況要因を他者は十分に考慮してくれず、そのため非常に厳しい評価を下すと推測することがいくつかの実験で示されている。たと

えば、非常に難しいアナグラム課題（ほとんどの人が解くことができない）で悪い成績を取った実験参加者は、そのアナグラム課題がどの程度難しいか知っている出題者役の実験参加者によっても自分の能力は低く見られるようになるかと予測していた。しかし実際には、出題者役の実験観察者は、そのような難しいアナグラム課題が出来なかったことによっては、回答者役の実験参加者の能力評定を低くすることはなかった。このように、失敗（課題が解けない）をした実験参加者は現実よりも過度に自分が厳しく評価されると予想していたのであり、自分の行為に対する他者の評定を厳しい方向に歪んで推測する傾向があることが示されている。

さらに Kruger and Gilovich (1999) は、共同作業における責任帰属を題材に、相手の認知（責任帰属）を推測させる実験を行った。彼らは実験参加者2人に共同でTVゲームをさせ、それぞれのプレーヤーに遂行結果の望ましい側面と望ましくない側面（たとえば、ゲームで得点したことと、失点したこと）について自分の責任評定と相手の責任評定に対する推測を行わせた。評定は全責任を100%とした場合、自分に何%の責任があるとするかという形式で測定された。その結果、2者の自分の責任評定の合計点は、望ましくない側面については有意に100%を越えており、望ましくない結果を自分自身の責任とする傾向が見られた。しかし、2者の相手の責任評定の推測を合計すると、望ましい結果において評定が100%を越え、望ましくない結果については評定が100%を下回っていた。つまり、相手は望ましい結果に対しては、過度に自分の貢献を評価し、逆に望ましくない結果に対して



は自分の責任を過小に評価するという推測をしていたことになる。自分自身は、望ましくない結果について過度に責任を評定する傾向を示していたのに対し、相手はそうではないと推測したことは非常に興味深い。この結果は、人々が同じ出来事に対して、他者と自分が異なった認知をすること、そして、他者の認知が自己奉仕の方向に歪んでいると推測することを示している（図2）。

このように、相互作用相手の自分に対する推測というメタ認知が歪んでいることが、様々な形で明らかにされてきている。

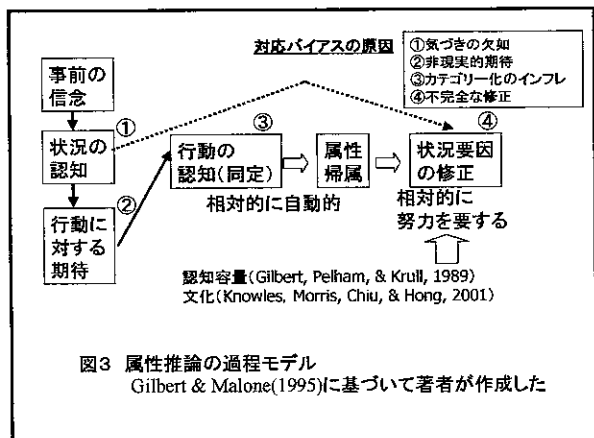
対応バイアスの過大視

上記のように多岐にわたる相互作用におけるメタ認知の研究の中で、ここで取り上げたいのは、行為者による自分自身の属性に関するメタ認知である。特に、状況の制約の元でとられた行動から他者がどう行為者の属性を判断するかという事に関する推測である。ある状況に置かれた行為者の行為から人々がその属性を判断する際には対応バイアスが生じることがよく知られている。逆に、行為者側からのメタ認知について考えた場合には、行為者自身がこの対応バイアスを推測する事ができるのかという問題が浮上する。

対応バイアス：ここで行為者による（観察者の）対応バイアスの推測の問題を論じる前に、対応バイアスとその生起原因に関わる問題について簡単に触れる必要があるだろう。対応バイアスとは、行為者の行動には状況の拘束によって生じた部分もあるにもかかわらず、観察者がそれを十分に考慮せずに行行為者の行動に対応する属性を推測する傾向を指す。言うまでもなく対人認知におけるバイアスの中でもっとも著名なものの1つであり、Jones and Harris (1967)以来、多大な量の研究が行われ、その頑健さはよく知られている。

対応バイアスの生起過程については、Gilbert and Malone (1995) のモデル（図3）が最も有名であり、多くの研究の土台となってきた。このモデルでは、対応バイアスの生起の原因として、①状況要因に対する気づきの欠如、②

状況の影響力に対する非現実的な期待、③カテゴリー化のインフレ、④不十分な修正の4つが想定されている。しかし、現実には、最後の修正過程に焦点が最もあたっており、それ以外の要因は相対的に焦点が当たりにく



くなっているように見受けられる。例えば、対応バイアスが生じなくなる限定条件として挙げられるのは、修正への動機づけがあるが、これは、その名の通り、動機づけが高い場合は、最後の修正過程が働きやすくなり、対応バイアスが生じにくくなることを意味する。例えば、Fein (1996) は、観察者側に行為者の意図に対する疑念があれば、その意図の効果を取り除こうとする動機づけが働き、その意図を割り引く形で属性推論を行い、対応バイアスが消失することを示している。また、Vonk (2000) は、自分が観察者の場合には、行為者の取り入り行動からその態度を推測する場合に、推測される意図に基づいて判断を修正するが、自分が直接とり入りの対象となっている場合には、この修正が行われにくい(よって、結果的に取り入りが功を奏する)のは、(認知容量などのその他の要因によるのではなく)この動機によることを示している。

また、近年、文化心理学の立場から、対応バイアスは北米を中心とした相互独立的自己観を持つ文化に特有の現象であり、東アジアの相互協調的自己観を持つ文化においては、対応バイアスは生じにくい、あるいは、生起してもそれは弱いという議論がなされてきた(eg., Knowles, Morris, Chiu, & Hong, 2001)。この議論で対応バイアスの生起を決定づける要因として想定されているのは、修正過程における状況要因の考慮である。つまり、個人を行動の主体

とみる見方が相対的に弱く、文脈に敏感な東アジアの人々は、状況要因により注意を払いやすいので、属性推測において状況要因の影響をたやすく修正することができ、その結果、対応バイアスは生じないという論理である。このように、ここでも、焦点が当てられているのは修正過程であった。

対応バイアスの過大視：さて、上記のような対応バイアスを行為者自身はどのように推測するのだろうか。VanBoven, Kamada, and Gilovich (1999) は、対応バイアス研究のパラダイムを用い、行為者に観察者の判断を推測させる実験を行った。その結果、これまでの研究が示してきたとおり、観察者は対応バイアスを示し、行為者の行為は強い状況の拘束の元で生じており、行為者の属性を表すものではないにも関わらず、行為者の属性がその行動に対応していると判断していた。そして、それだけでなく、行為者はむしろ、観察者の対応バイアスを現実よりも過大視する傾向があることが示された。つまり、行為者自身は要請に応じて（状況の拘束の元で）自分の属性とは無関係にある行動をとり、観察者はそのこと（行為者の行動は要請に応じたものであること）を知らされていることを行為者は了解していたにもかかわらず、行為者は、観察者は状況の拘束力を十分に割り引かず、行動と自分の属性を対応づけるだろうと推測していた。この行動と属性をそのまま対応づけて判断する程度の予測は、現実に生じた観察者による対応バイアスよりも顕著であり、「対応バイアスの過大視」が生じていたことになる。

VanBoven et al (1999) における主要な実験は、Gilbert and Jones (1986) の手続きを用いたものである。具体的な実験手続きは以下のようなものである。実験参加者は質問者役と回答者役にランダムに割り振られる。質問者は与えられた質問リストを読み上げ、回答者は2つの選択肢のどちらかを選択して回答する。選択肢は片方が愛他的で、他方が利己主義的な回答で構成されていた。回答者は自分では選択肢を選ぶことができず、指示された通りに愛他的あるいは利己主義的回答をすることになっていた。回答者がどちらの選択肢を選択するかは、実験者によってあらかじめ定められていたが、それは質問者の合図に

よって回答者に知らされた。よって、質問者も回答者が自分の意思で選択肢を選んでいないことは明確に理解できる状況にあった。半数の条件では、回答者の回答はその80%が愛他的に、もう半数の条件では、回答の80%が利己的になるように回答はスケジュールされていた(図4)。

質問と回答のやりとりの終了後、質問者は回答者の真の属性がどの程度愛他的であるか評定し、回答者は質問者がどのように回答するかを推測した。質問者の

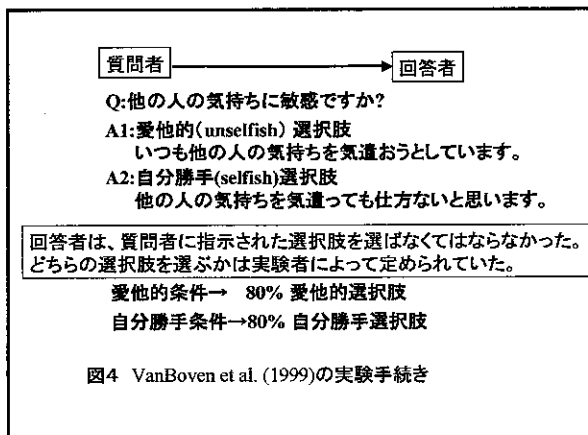
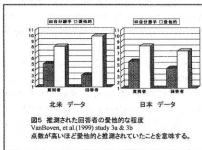


図4 VanBoven et al. (1999)の実験手続き

回答が従来の対応バイアス研究における従属変数である。この実験状況においては、回答者の回答は100%状況に拘束されているので、質問者がその状況要因を十分に考慮することができれば、愛他・利己主義条件間で質問者による評定の違いはないはずであると考えられる。しかし、愛他条件の回答者は利己主義条件の回答者よりもより愛他的に評定されており、質問者による対応バイアスが生じていた。さらに重要なのは、回答者の推測であり、愛他主義条件と、利己主義条件の回答者が推測した質問者による評定の差異は、現実の質問者の評定の差異よりも大きかった。つまり、質問者は回答者の回答に対応するように回答者の属性を推測していたが、回答者自身は、現実よりも自分が回答と対応する属性を有していると推測されると推測しており、実際に生じた対応バイアスよりも、推測された対応バイアスの方が大きかったのである(図5左側)。

実はこの結果は、VanBovenらの予測に反するものであった。彼らの予測は、行為者は過度に自分自身の本来の属性が観察者に伝わるというものであった。つまり、実験条件の要請に応じて「利己主義的」な回答をしていても、本

当の属性（それとは異なる）を推測してもらえると期待する考えたのであった。これは、先に述べた透明性の錯覚に基づく予測である。対応バイアスの過大視と透明性の錯覚に関する問題（相違点についてのは、後に取り上げる。



さらに、VanBoven et al (1999) は、対応バイアスに文化差があるという議論と同様に、対応バイアスの過大視にも文化差があるという指摘をしている。上に挙げた実験を日本人を実験参加者として実施したところ、質問者による対応バイアスは生じていたものの、回答者による対応バイアスの過大視は生じず、回答者の推測は質問者の評定と統計的に異ならなかった（図5右側）。しかし、Kudo, Pelham, & Shimizu (2002) は、異なる手続によってではあるが、日米両サンプルにおいて対応バイアスの過大視を見いだしている。よって、必ずしもここで指摘された文化差はロバストなものである保証はなく、文化差の有無に関しては今後検討する必要があると考えられる。しかし、ここで注目したのは、VanBoven et al (1999) らによる文化差の説明は、修正過程における文化差に着目したものであったことである。

対応バイアスの過大視の生起メカニズム

2つの説明可能性：この対応バイアスの過大視が生起するメカニズムについては、まだ決定的な説明は存在しない。VanBoven らの説明は、自分と他者

に対して持つ、推論に関する期待の違いによるものである。つまり、人は、(自分に比べて)他者は状況要因に注意を払わず、それを考慮しないと考えているからという説明であり、言い換えれば、他者の推論過程における状況要因の修正に関する過小な期待とすることができる。

この説明は一定の説明力を持つが、対応バイアスの過大視を生む原因としては他の原因を考えることもできる。そのひとつに自分の行動の内的顕現性が考えられる。実験条件の要請に応じて行動している行為者にとって、自分の行動は自分にとって非常に顕現性が高く、詳細な情報を有すると推測できる。しかし、一方観察者にとっては、行為者自身ほどにはその行為についての情報は得られない(あるいは観察できない)と考えられる。行為者にとってのこの内的顕現性の高さと豊富な情報が、行動の程度の極端さと混同されて判断に影響する可能性が考えられる。つまり、行為者自身にとって、自分のとっている行動が観察者に見えるよりも極端なものであると認識される可能性である。言い換えれば、観察者と行為者が属性推論の土台としている行為そのものの評価が観察者と行為者間で異なっているため、結果的に属性推測も異なってしまうという可能性である。

ここで、従来行為者観察者バイアスの説明に用いられてきた“観察者にとっての行為の顕現性”の説明と、ここでの“自分の行動の内的顕現性が高い”という説明の相違について説明する必要があるだろう。行為者観察者バイアスでは、観察者にとって、行為者の行為は“凶”として捉えられるために顕現性が高く、それゆえに目立つ行為者が行為の原因とされやすく、観察者による帰属は属性に傾きやすいと説明されてきた。一方、上記の内的顕現性の説明は、行為のみを問題にしており、状況とどちらが目立つかという議論ではない。いずれにせよ、顕現性による行為者観察者バイアスの説明は、説得的証拠に欠けることが指摘されている (Gilbert & Marlone, 1995)。

自分の行動の内的顕現性仮説の検討：もし、上記の2つめの説明の通り、自分のとった行動の内的顕現性の高さおよび(活性化している)知識が、対応バ

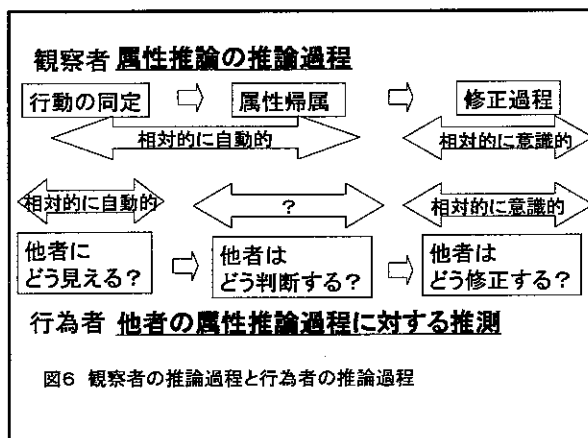
イアスの過大視の生起に寄与しているなら、その顕現性と（活性化している）知識を下げることににより、対応バイアスの過大視は消失あるいは減少するはずである。そこで、Kudo et al. (2002) のように行動（自己呈示）直後ではなく、1週間後に自分の自己呈示に基づいた観察者による属性判断を行為者に推測させる実験を行った。観察者は状況の要請についての情報を与えられていたし、行為者はそのことを理解していた。実験参加者の人数が少なく、結果は統計的に明確ではないが、直後には生じていた対応バイアスの過大視は一週間後の測定では弱くなる方向にあった。この点を明らかにするために、推測時の行為者による自分の行動の内的顕現性を操作した実験的検討が必要である。

透明性の錯覚と対応バイアスの過大視

透明性の錯覚の生起メカニズム：透明性の錯覚の生起メカニズムの説明は大きく分けて2つあると考えられている。1つは、行為者の内的手がかりの顕現性であり、もう1つは観察者と行為者の知識の差（を行為者が考慮できないこと）である（Vorauer, 1999）。特に生理的喚起を伴う行動の場合（人前で嘘をついて見抜かれないようにするなど）は第1の説明が適用され、生理的喚起を伴わない場合は第2の説明が適用されやすい。

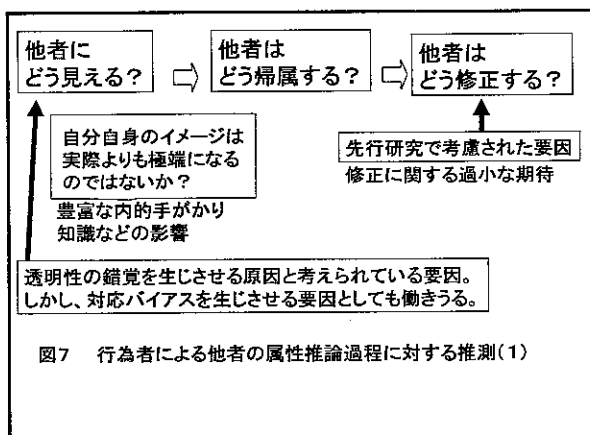
対応バイアスの過大視と透明性の錯覚の関係：透明性の錯覚と対応バイアスの過大視という2つの現象は、一見すると逆の関係にあるように見える。前者は本当の自分が過度に伝わると推測し、後者は本当の自分が伝わらないと過度に推測する傾向であるようにとれる。しかし、他者から自分の属性や内的状態がどのように判断されるか、評価されるかという推測のプロセスを図のような3段階と考えると、両者を整合的に整理することができる（図6）。属性推論のプロセスを援用すれば、第2段階は第1段階からほぼ自動的に判断される過程だと想定できるが、この点については実験的検討が必要である。また、厳密には、透明性の錯覚が対象としているのは、属性ではなく、そのときの内的状態

である場合が多いので、この点に注意が必要かもしれない。図6を対応バイアスの過大視と、透明性の錯覚の推論過程に焦点を当てて描きなおしたものが図7である。このように整理してみると、属性推論のメタ認知と捉



えることで対応バイアスの過大視は理解しやすくなることがわかるだろう。

透明性の錯覚と対応バイアスの過大視の研究が扱っている状況の違いの一つに、状況の制約が挙げられる。つまり、透明性の錯覚は強い状況の制約の効果の問題にして研究がおこなわれていない。よって、その生起プロセスにおいても主に第1段階と第2段階に焦点が当てられていて、修正過程はあまり重視されない。一方で、対応バイアスの過大視は、状況の制約の効果に焦点があるが、第1段階、第2段階のプロセスも対応バイアスの過大視を生じさせる心理過程に含まれると考えてよいだろう。しかしながら、対応バイアスの過大視の研究においては、第3段階にのみ強い焦点があたり、第1段階、第2



段階の役割は相対的に考慮されてこなかった。

ここで、論じたいのは、透明性の錯覚が「他者は行動から判断する」という推測プロセスに導かれているように、対応バイアスの過大視も部分的には、同一のプロセスに導かれるということである。部分的としたのは、対応バイアスの過大視は、「他者は行動から判断する」と推測するというプロセスだけから生じるのではなく、先行研究がとりあげているように、第3段階である他者の修正に関する推測（状況要因の割引に関する推測）も重要な生起要因であると考えからである。

一見、対立するように見える透明性の錯覚と対応バイアスの過大視は、上記の過程の中の第1段階（第2段階も含めるかどうかは、当該の従属尺度によるかもしれない）における以下のようなプロセスで整合的に説明できる可能性がある。透明性の錯覚は、自分がとった行動の中に真の自分が反映されていると考えるため、その真の自分が他者に捉えられると推測する。しかし、対応バイアスの過大視においては、行動の中に偏ったあるいは、偽りの自分が反映されていると考える。そして、他者にはそのような偏った自分が捉えられ、それを基準に判断すると推

測すると考えられる。両者の判断が観察者のそれと異なり、透明性あるいは対応バイアスを過大視するのは、このとき行為者自身に捉えられている自己像（行動）が、生理的喚起や知識の活性化などによっ

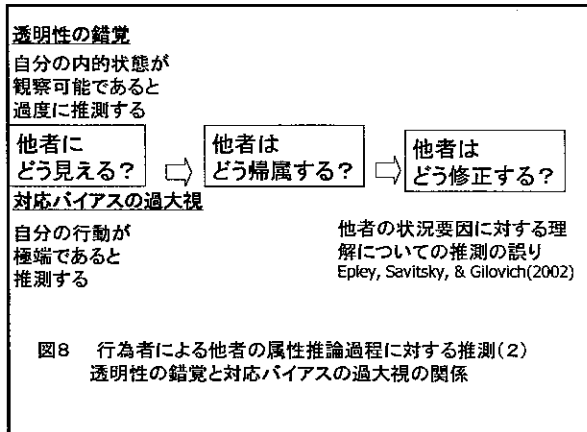


図8 行為者による他者の属性推論過程に対する推測(2)
透明性の錯覚と対応バイアスの過大視の関係

て、現実には他者から見える行動よりも極端な方向に歪んでいることによると考えられるのではないだろうか（図8）。

もちろん、この可能性については実証的検討が必要である。特に同一状況において、自己のどの側面に注意を向けるかに応じて、対応バイアスの過大視あるいは、透明性の錯覚が生起する事を示す必要があるだろう。また、実際に顕現性が高まっている自己像が過大視や錯覚を媒介しているというプロセスの検討も必要だと考えられる。

ま と め

ここで見てきたように、近年、行為者によるメタ属性推論の過程に関する研究が盛んに行われるようになってきたが、そこで見られるバイアスは明らかになってきたものの、そのバイアスの生起原因についてはいまだに不明な点が多い。本論では、対応バイアスの過大視と透明性の錯覚という一見、逆の現象に見えるバイアスを取り上げ、両現象に共通する推論過程が存在する可能性を論じた。これまでのところ、行為者によるメタ推論のさまざまなバイアスの存在が明らかにされてきたが、今後は、行為者によるメタ推論過程の統合的理解のための枠組み作りが求められるだろう。

註

- 1) 本論は日本心理学会第回大会ワークショップ「人と状況」における発表（属性推論過程における状況要因の考慮のされ方）の一部を加筆修正してまとめたものです。発表に当たり、貴重なコメントをいただきました外山みどり先生（学習院大学）、唐沢かおり先生（名古屋大学）、平石界先生（東京大学）に感謝申し上げます。
- 2) 本論をまとめるに当たり、平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（c）課題番号13610181）の補助を受けました。
- 3) 本論をまとめるに当たり、沼崎誠先生（東京都立大学）に貴重なコメントをいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- Fein, S. (1996) Effects of suspicion on attributional thinking and the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*,

70, 1164-1184.

- Gilbert, D. T., & Jones, E. E. (1986) Perceiver induced constraint: Interpretations of social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 269-280.
- Gilbert, D. T., & Malone, P. S. (1995) The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, 117, 21-38.
- Gilbert, D. T., Pelham, B. W., & Krull, D. S., (1989) On cognitive busyness: When person perceivers meet person perceived. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 733-740.
- Gilovich, T., Medvec, V. H., and Savitsky, K. (2000) The spotlight effect in social judgment: An egocentric bias in estimates of the salience of one's own actions and appearance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 78, 211-222.
- Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998) The illusion of transparency: Biased assessment of others' emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 332-346.
- Jones, E. E., & Harris, V. A. (1967). The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 3, 1-24.
- Kenny, D. A., & Depaulo, B. M. (1993) Do people know how others view them? An empirical and theoretical account. *Psychological Bulletin*, 114, 145-161.
- Knowles, E. D., Morris, M. W., Chiu, C., & Hong, Y. (2001). *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1344-1356.
- Kruger, J., & Gilovich, T. (1999) "Naïve Cynicism" in everyday theories of responsibility assessment: On biased assumptions of bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 743-753.
- Kudo, E., Pelham, W. B., & Shimizu, M. (2002) A second look at metaperception: Examination of strength of social constraints and cultural differences in the overestimation of the correspondence bias. unpublished manuscript.
- Pelham, W. B., Hardin, C. D., & Krull, D. S. (under review) Practice Makes Perfect?: Judgmental expertise and the correspondence bias.
- Savitsky, K., Epley, N., and Gilovich, T. (2001) Do others judge us as harshly as we think? Overestimation of the impact of our failures, shortcomings, and mishaps. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 44-56.

- Shrauger, J.S., & Shoeneman, T.J. (1979) Symbolic interactionist view of self-concept: Through the looking glass darkly. *Psychological Bulletin*, 86, 549-573.
- VanBoven, L., Dunning, D., & Loewenstein, G. (2000) Egocentric empathy gaps between owners and buyers: Misperceptions of the endowment effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 66-76.
- VanBoven, L., Kamada, A., & Gilovich, T. (1999) The perceiver as perceived: Everyday intuitions about the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1188-1199.
- Vonk, R. (2002) Self-serving interpretations of flattery: Why ingratiation works. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 515-526.
- Vorauer, J. (2001) The other side of the story: Transparency estimation in social interaction. In Moskowitz (Ed.) *Cognitive Social Psychology: The Princeton Symposium on the Legacy and the Future of Social Cognition*, LEA, Pp 261-276.